

養成せんと議は岡倉覺三氏校長時代よりの宿題なるが正木校長は愈女生徒養成の意見書を認め文部大臣へ建議せり 尤も當局者中に反對論者多き由なれば實行されんことは餘程困難なるべしと云へり

と記されている。この建議書の内容は不明であり、また、年報の「将来必要ト認ムル件」の項にも本件に関する記載が無いが、右の報道が事実であるとすれば、少なくともこの頃本校側には女生徒養成の意志があつたことがわかる。

⑤ 入試課目改正

明治三十三年十二月の規則改正により翌三十四年から仮入学制度が実施され、以来、入学者選抜方法は

一、仮入学（無試験で入学させ、三ヶ月後に実技試験を行い、合格者を予備の課題へ入学させる。）

二、競争試験（合格者を直ちに予備の課程へ入学させる。）

の二通りとなつた。二の場合の試験課目（76頁参照）には学科と専門実技とがあつたが、同三十六年に至り学科が廃止された。したがつて、本校ではこれ以後入学試験は実技試験のみとなつた。

⑥ 東京美術学校參觀記

○上野の若葉 昨日久々にて東京美術学校を訪問致候 幸に彫刻科教授黒岩淡哉氏出勤中にて參觀の便を得たり 同氏は先に佛國大博覽會に自作を出品して金賞を得られし人に候て亦今回大阪に

開設せる第五回博覽會美術館前噴水楊柳觀音には熱心に力をいたせし青年彫刻家に御座候 氏語て曰ふ 本校の夏季休業は例年七月中旬に始まり九月中旬を以て終る規定なれ共本年は博覽會の爲修學旅行として去る十日より休業 學生には關係之助羽田禎之進の兩氏附添ひ既に奈良を経て大阪に向へり 尙ほ下村觀山、白井保次郎、櫻岡三四郎の諸氏は英に佛に米に留學中にていと淋しく當時校舍は明店の感あり けれども日本畫教室に（マ）に本年度の卒業製作並に競技成績の陳列しあればイザ案内せんと玄關正面の階上日本繪畫科第四年教室に導びかる 教室の廣さ約四十四坪 玆に甲種四五乙種二五の競技成績の陳列を見る 競技の畫題は艷麗題意を妙齡の婦人に借りしもの多く山水、花鳥は稀なり 甲種の分にて小西義雄、松岡輝夫、長峰虎雄、植松盛之助、佐治友八、小泉勝爾を始め見る可きの作多し 元來競技は課題艷麗の元に本科三年以下豫科選科（選）を通じて製作競技せしもの 豫科にて合格せしは小泉勝爾あるのみ また望を囑す可き？

順次別室に本年度の卒業製作を觀る 製作枚數十四 總て三尺巾と見受く 百花爛熳（漫）たるこみちに露をいとえる唐美人 さては平家の都落ちとでも題す可き横もの 兩者共に佳作とす 只惜らくは前者は骨格描法に注意の足らざるなきか 然れども周圍に於ける苦心はよく此のピカを許す可く以て全面を貶するに足らざる可し 後者は水墨を以て後景二三の人影を現はす 筆者も定めし遠近を取らん意に外ならんも其はなくもがなにて前景既に線を施し密なる彩色を加えし人物と甚はだ調和を欠けり 是れを昨年の成績に比して進歩上雲泥の差あり 誠に人物畫に於ては驚く可

きの進歩と云ふ可く同校日本畫科の本年に於ける特長と云ふ可し

次で花鳥山水は尙幾多の習練を要す 日本畫成績の觀覽を終り彫刻室に導かる 坪數約四十 入口右方大姿見に添ふ一脚のテールあり主任教授の席とす 茲に有髯肥滿せる一見溫厚年輩五十二三の教授裕にシガレットをふかし憩ふ 別人ならぬ高村光雲氏なり 教室の中央に花を手にせる少女と年頃十八九とも見ゆる裸躰の美人あり 共に高サ四尺 同氏の説明に依れば兩者共塑造卒業製作にして尙ほ二個は仕上中なりと 尙ほ北面して左手書籍を持し右手を胸邊に翳して直立するは種痘の成功者ゼンナー氏銅像の原型にして材は檜を用ひサビ漆を加へしもの 大さ實物以上にして原型を除き製作日數四ヶ月を要せし由 氏は我國彫刻の盛衰には説明甚だ親切なり かゝる教授に教を受くる學生こそ幸福も亦大なる可し 高村氏の教室を辭して黒岩君の擔任せる新入生十六名の原型講習作業を一見致し候へども追々に御報可仕候(北垣靜處氏書信の一節 文〔文芽の略カ〕)

(明治三十六年六月二日『京都日出新聞』)

⑦ 図画教授法講習会および木炭画・鉛筆画講習会・図画教育会

明治三十五年発足の図画取調委員会の活動に付随して、同三十六年の夏には本校に於て文部省図画教授法講習会が三週間に亘つて開催され、これと併せて本校主催の木炭画、鉛筆画講習会が開かれて、全国の中等学校から多数の教員が参集した(本書218頁記事参照)。ここに図画教育研究の氣運が高まり、右講習会終了後、出席者たちによつて図画教育会が結成された。

図画教育会の会長には正木直彦が就任し、白浜徹が幹事となり、事務所は本校内に置かれた。『図画教育』(明治三十六年十二月創刊)



『図画教育』第1号

はその機関誌である。同会の会員はじめは三百名ほどであったが、のちに六百名の多きに達し、各地に支部が置かれた。学校単位の入会もあった。後出「明治四十四年再調会員宿所録」によれば会員総數五七六名、うち東京美術学校卒業生が二七・六%を占めている。木元平太郎、岡田秀、鶴川俊三郎、柿山蕃雄らは委員として会の運営につとめた。同会の事業の中心は教科書編纂で、明治三十七年には中学図画教科書(十二冊)、高等女学校図画教科書(五冊)、図学教科書(四冊)を、同四十一年には中学図画教科書および高等女学校図画教科書の改訂版を編集し、鐘美堂、北村書店、明治図書等から発行。売れ行き良く、その収益を以て会の活動が続けたが、教科書編纂をめぐつて内部に対立が生じたことなどにより、大正四年に解散した。